

小児のプライマリ・ヘルスケアの確立に関する研究

—— アメリカワシントン州キティタス郡における
保母の保育活動の現状 ——

田 川 智 子
(保健研究室)

Studies of Current Primary Health Care of Children in Day Care Centers
— A current situation re Day Nursery Attendants
in Kittitas County, Washington, U.S.A. —

Tomoko TAGAWA

Keywords : Primary Health Care, Day Nursery Attendants, Day Care Center, America

キーワード：プライマリ・ヘルスケア、保母、デイケアセンター、アメリカ

I. はじめに

近年、女性の社会進出や核家族化が進み、わが国においても家庭の育児力が著しく低下し、地域の育児力、教育力が重要になってきている。

地域の育児力、教育力を高めるためには、地域独自の問題を発見し、その問題解決へ向かって地域が活性化することが必要であり、21世紀を担う子供をとりまく環境としてCommunity developmentの概念が地域社会に浸透し、根づいていくことが期待される¹⁾。

著者は過去²⁾、小児のCommunity based primary health careの確立に関する研究を行った中で、子供を全人的にとらえていく視点の重要性に加えて、各家庭と働く母親の職場と子供を預かる側の保育所がダイナミックに機能することができる地域社会の環境をシステムとして整えていくことがいかに大切かを示唆してきた(田川 1988, 1993)³⁾⁴⁾。

保育実践にもPrimary care nursing⁵⁾の規定理論を応用・導入し、保育施設がシステムとして機能していくことが必要だと思われる。

1993年の夏、アメリカワシントン州における保育施設の視察 (Informational Questionnaire) の機会に恵まれ、アメリカの「Primary care nursing research」の歴史に学ぶべき若干の示唆を得たので報告する。

第1報(田川・1995)⁶⁾では、保育施設の質とは何か? また、施設がサービスの提供に関する地域的枠組みにどのように組み入れられるのか? など改めて考えてみることを目的に、特に印象深かった施設をケーススタディ⁷⁾として取り上げ、アメリカのNursery System⁷⁾、マンパワーの充実、Primary care nursing⁸⁾と保育について検討した。

本稿では、地域における保育活動の現状を把握し、学ぶべき点を具体化する目的でデイ・ケア・センター

の保母を対象にインタビューと意識調査を行ったのでその結果を報告する。

Ⅱ. 調査対象及び方法

1993年7月から8月にかけて、ワシントン州キティタス郡（Kittitas County）における保育施設を訪問し、保母30名を対象に独自に作成した調査票を留め置き、同時にインタビューを実施し、2週間後に回収した。

調査内容は保育所の役割、保育者の保育理念、重点的保育方針、保育活動上の問題点、保育関係機関・スタッフに対する要望などの質問項目を骨子として作成し、回答を求めた。

回収率は83.3%（25名）であった。保母の平均年齢は31.2歳、平均経験年数は8.6年であった。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 保育所の役割

保育所の役割については、第1表に示すごとく、「基本的なしつけと社会的ルールの指導」（26.7%）、「教育的なプログラムの展開」（21.3%）、「健康管理と安全性の保障」（14.7%）、「子供のニーズ（生理的側面と情緒的側面）に適った家庭的な環境」（12.0%）、「個性を尊重した楽しい生活の保障」（10.7%）、「経験豊富なスタッフの充足」（8.0%）、「両親へ子育て情報の提供」（6.6%）の順であった。

とりわけ、保育所が教育的なプログラムを展開していくことの意義と必要性を強調していた。保母に対するインタビューの中で強調されていたのは、デ

イリープログラムの中で、グループ遊びと自由遊び、動的な活動と静的な活動のバランスを考慮することであった。デイリープログラムのデザインには、子供と対話し、子供の成長を引き出す保母の教育能力や態度が問われている。

現在、日本においても、保育所の果たすべき役割として保育の専門性が問われ、子育ての専門家として、教育的なアプローチのできる保母が求められているが、アメリカでもこの点に関して重点が置かれていた。

又、両親へ子育て情報を提供する役割が記載されていたが、子供に対する教育的プログラムを充実させることに加えて、保護者や家族に対する教育的プログラムを体系化していくことの必要性を実感した。

著者は過去10年間、島根県教育委員会主催の「家庭教育充実事業」の企画推進委員及び専門委員として、子育てに関する情報提供や学習機会の提供、巡回相談、グループワーク等によって家庭教育の活性化を図ってきたが、保育所サイドと家庭サイドのより有機的な連携が大切であり、パイプ役としての保母の資質が重要だと思われる。

2. 保育所と保育者の理想像

保育所の理想像については、第2表に示すごとく、「楽しく教育的で安全な環境の保障」（34.0%）、「子供の個性を尊重できるスタッフの充足」（30.0%）、「発達段階に応じた子供のニーズを満たす」（22.0%）、「施設的环境整備と適切な用具、玩具の完備」（8.0%）、「デイリープログラムの体系化」（6.0%）の5項目であった。物的環境のみならず、人的環境要因

第1表 保育所の役割

	件	(%)
基本的なしつけと社会的ルールの指導	20	(26.7)
教育的なプログラムの展開	16	(21.3)
健康管理と安全性の保障	11	(14.7)
子供のニーズに適った家庭的な環境	9	(12.0)
個性を尊重した楽しい生活の保障	8	(10.7)
経験豊富なスタッフの充足	6	(8.0)
両親へ子育て情報の提供	5	(6.6)
計	75	(100)

として、子供の個性を尊重できるスタッフを望んでいる点が強調されていた。

日本と異なり、子供の権利条約にうたわれている理念、つまり実践主体としての子供の参加の原理が推奨されているが、アメリカでは、家庭や保育所、幼稚園、あるいは初等教育のなかで「自分自身の権利と義務」についての教育を受け、またそうした立場が保障されている。

一人ひとり異なった生活史をもつ人間であるといった考え方が大切であり、保育所というひとつの集団生活の中で、それぞれの個性を尊重しながら、「共生」の意味を幼児期から体験させていくことが必要だと考える。

アンケートの回答には、保育所の社会的位置づけやコミュニティとの関連については記載されていなかったが、インタビューでは、保育所とコミュニティについて、健やかな子供の成長、発達を保障するためには、家庭と保育所、さらにコミュニティにおける三者の連携を強化することが重要であるとの意見が多く聞かれ、ライフスタイルと地域特性を考慮した子育て支援対策が今後ますます必要になってくると思われる。

また、デイリープログラムの体系化を訴えていた保母のコメントによると、既成のソースブックやガイドライン等は周囲に多々あるが、我々スタッフに課せられた大きな課題は、各々の保育所の地域特性や子供をとりまく家庭環境、親の就労状況、社会的背景等、丁寧にアセスメントし、オリジナルなプログラムを作り出していくことだと訴えていた。生きた教育、手作りの教育の根本理念が込められているのを実感した。

次に、保育者の理想像については、第3表に示すごとく、「子供と一緒に学ぼうとする姿勢」(26.2%)、「子供と共に感動できる感性」(24.8%)が多く求められていた。昨今では、日本においても、子供に学ぶ子育ての理念や親の姿勢が尊ばれ、効を奏してきているが、アメリカでもこの点を強調していた。

また、天職としての使命感、責任感、保育職にかける意欲を求める回答が多くみられた。

少数ながら、「子供のニーズや状況に敏感で気配りができる」(4.2%)、「子供の質問に丁寧に応じ、話し合える雰囲気づくりに努める」(3.5%)、「消極的な子供にも新たな方向づけ、勇気づけができる」(1.4%)等の回答がみられ、自己の洞察力、自己のカウンセリング能力をみがいていこうとする前向きな姿勢が感じられた。

また、「決断の手助けをする」(6.9%)と記載されていたが、最近、学校教育や社会教育の場で、「自己決定」の重要性について考えさせられることが多くなっている。幼い時からの親や養育者の態度が反映するものと思われ、日常の積み重ねが、後の人格形成に大きく関与するものと考えられる。

遊びの指導についてのインタビューでは、「何をして遊ぶか」を子供同志で考えさせ、その遊び方も子供の発想を大切に、保母は、ヒントを与えながらゲームを発展させる役割であることをよく認識して接しているといった回答が多かった。

3. 子供に対する保育目標

子供の成長・発達過程における保育目標については、第4表に示すごとく、最も高率を示したのは、「積極的な自己イメージ、個性を育む」(34.9%)と、積極性が重んじられていた。子供同志がお互いに知

第2表 保育所の理想像

	件	(%)
楽しく教育的で安全な環境の保障	34	(34.0)
子供の個性を尊重できるスタッフの充足	30	(30.0)
発達段階に応じた子供のニーズを満たす	22	(22.0)
施設的环境整備と適切な用具・玩具の完備	8	(8.0)
デイリープログラムの体系化	6	(6.0)
計	100	(100)

第3表 保育者の理想像

	件	(%)
子供と一緒に学ぼうとする姿勢	38	(26.2)
子供と共に感動できる感性	36	(24.8)
献身的で忍耐強く一貫したしつけができる人	18	(12.4)
経験豊かで個性を尊重できる人	15	(10.3)
決断の手助けをする	10	(6.9)
自分の仕事に誇りと楽しみを見いだせる人	8	(5.5)
信頼感があり公平で理解力のある人	7	(4.8)
子供のニーズや状況に敏感で気配りができる	6	(4.2)
子供の質問に丁寧に応じ話し合える雰囲気	5	(3.5)
消極的な子供にも新たな方向づけができる	2	(1.4)
計	145	(100)

第4表 子供に対する目標

	件	(%)
積極的な自己イメージを育む	29	(34.9)
好奇心を喚起し学ぶ気持ちを引き出す	24	(28.9)
自立心を養う	12	(14.5)
心身共に健康	10	(12.1)
活発によく遊ぶ	8	(9.6)
計	83	(100)

り合い、お互いを評価し、友情を築いていくプロセスが大切であり、その中で「自己形成」をしていくわけである。個性を伸ばすには、楽しく興味深い学習、経験をさせることはもとより、カンファレンス方式やバズセッション方式等のディスカッションのプロセスを大事にしていく学習方法が大切であると訴えられており、子供達とコミュニケーションを図る時間を作るように努力している姿勢が伺われた。

インタビューの中で特に私の心に響いた言葉は、「すべての子供に各々の可能性がある。養育に適切な環境の中で可能性に即して援助したい」という回答であった。一人ひとりの人間を大切にすること、

ひいては、「人間の尊厳」「生命の尊さ」に通ずる教えであり、乳幼児期から子供を慈しみ、愛情をもって導いていくことの重要性を実感した。次いで「好奇心を喚起し、学ぶ気持ちを引き出す」(28.9%)、「自立心を養う」(14.5%)、「心身共に健康」(12.1%)、「活発によく遊ぶ」(9.6%)の順であった。

4. 重点的保育方針

重点的保育方針については、第5表に示すごとく、「養護と教育の総合的プログラムが備わった円滑な運営」(31.4%)、「遊び内容に工夫を凝らし、創造性の基礎づくり」(22.9%)、「保育所の機能を高めるためにスタッフが最善を尽くす」(17.1%)、「オー

第5表 保育所の保育方針

	件	(%)
養護と教育の総合的プログラムが備わった運営	11	(31.4)
遊び内容に工夫を凝らし創造性の基礎づくり	8	(22.9)
保育所の機能を高めるためスタッフが最善を尽くす	6	(17.1)
オープンスペースで保育し情緒の安定を図る	5	(14.3)
子供の安全教育を強化する	5	(14.3)
計	35	(100)

「オープンスペースで保育し情緒の安定を図る」(14.3%)、「子供の安全教育を強化する」(14.3%)の5項目があげられていた。保育所生活の中で、子供同志がいかに関わり交流できるか、お互いに助け合ったり、いたわり合ったりできる場の提供も大切な要素だと考えられる。又、幼児期から子供の安全教育を重視しており、この点に関しては日本の保育所、幼稚園運営においても強化されなければならない教育実践プログラムだと考える。

5. 保育活動上の問題点

おもに行財政に関する要望(72.0%)が強く、運営予算、助成金の増額、土地の改良、施設の拡大、園庭の改善、設備の充実が訴えられていた。

インタビューでは、センター・ベースだけでなくホーム・ベースにも経済的な支援を送り、有効に双方のバランスをとって欲しいとの声も聞かれた。アメリカの地域療育システムとしての「デイ・ケア」には、「センター・ベース」と「ホーム・ベース」の二種類があるが、システムとしての「デイ・ケア」は、関連諸機関との有機的な関わりを大切に、優れたサービスを提供しており、コミュニティにおけるサポートネットワークの実践を展開している点で示唆に富むシステムと言える。

今後は、具体的な実践例をケーススタディとして取り上げ、「医療、保健、福祉、教育、文化」を包括した共同保育体制が、どのように展開されているのか、そこから学ぶべき点を検討していきたい。

わが国においても、総合的な保育システムの確立が急がれており、社会的ニーズに対応した保母養成機関の教育体制の改善も重要な課題だと考えられる。

また、わが国と同様に保母の研修機会を増やして

欲しいといった要望が強く訴えられていたが、保育教材を検討したり工夫したりする時間的なゆとりがあれば、活動内容にバリエーションが生まれ、新しいアイデアも生み出されるであろう。体系だった研修プログラムに基づくセミナーなどの参加が望まれるが、専門化する保育領域に対する卒後教育や実地訓練、生涯教育の保障も重要な課題だと考えられる。

さらに時間的にゆとりがないことと関連して、保育記録のとり方に対する指摘もみられた。現在の保育活動では、子供と保育者の活動の記録、子供の登園、帰宅時間の記録、保育所健康管理の面から子供の健康観察(顔貌、表情、きげん、皮膚、口腔内、視覚、聴覚、食欲、便通、睡眠)の記録、怪我や事故の記録、受診後の記録等をとっているが、そのデータを体系的にまとめ、分析する時間が足りないことが問題点としてあげられた。

健康観察の方法論、技術と関係して、「Problem Oriented Medical Record System」¹⁰⁾(問題志向型)に準じた記録のとり方が最も科学的な思考過程として重視されている。

発祥は、アメリカのWeed, Lawrence L. により提唱された医学教育だが、アメリカにおいても保育実践への導入は、十分なされていないのが現状であり、保育記録の質的な改善を図るためには、保育実践への導入が必要である。

著者は、かねてからこの点を指摘し、島根女子短期大学の保母養成課程における「小児保健」と「小児保健実習」の授業の中で、実際に「Problem Oriented Medical Record System」について教育しているが、学生自身の自己評価にも役立つシステムであり、今後は、日米いずれも「Problem Oriented

System」-POS 導入の保育教育の普及が一層望まれる。

IV. おわりに

今回の視察で切実に感じたことは、アメリカ女性の職業観、専門職に対する誇りと自信であった。女性の就労に対する歴史的背景の違いはあるが、今日では、日本女性も職業に対する意識の高揚が大切になってきている。

最近では、「ヒューマンサービス」という言葉がよく使われているが、医療、保健、福祉、教育、保育などの分野が、それぞれの領域で最善を尽くしながら統合され、総合化されて人間に働きかける思考が大切になってくると思われる。

アメリカにおいても、保育活動の問題点は、予算措置の問題、時間的ゆとりがないこと等、日本と共通の悩みが訴えられていたが、21世紀を担う子供達のために、今、我々に何ができるのか、何を丁寧に伝えていくべきか、真剣に問い直し、新しい「子育て学」の確立に向かって努力したいと考えている。

今回、アンケート調査だけに終わらず、限られた人数ではあったが、実際にワシントン州キティタス郡の保母職の方々とディスカッションできたことは、大変貴重な体験であり、今後の保育教育に生かしたい。

謝 辞

本研究にあたり、視察を快く受け入れ、インタビューやアンケート調査にご協力頂きましたCentral Washington University Preschool, Foursquare Church Preschool, Childrens Hour Day Care, CMA Day Careのディレクターならびにスタッフの方々に心から感謝の意を表します。

参考文献

- 1) Central Union For Child Welfare In Finland: Child Welfare in Finland, Finland (1977)
- 2) World Health Organization: The Alma-Ata Conference on Primary Health Care, WHO Chronicle, 32 409~430 (1987)
- 3) 田川智子: 島根女子短期大学紀要, 26, 159~165 (1988)
- 4) 田川智子: 島根女子短期大学紀要, 31, 103~112 (1993)
- 5) Diers, Donna.: Research in Nursing Practice, J.B. Lippincott Company (1979)
〔ドナ・ディー著 小島通代他訳「看護研究—ケアの場で行うための方法論」, 日本看護協会出版会, 東京 (1984)〕
- 6) 田川智子: 島根女子短期大学紀要, 33, 33~40 (1995)
- 7) Steven P. Shelov, M.D., F.A.A.P., Robert E. Hannemann, M.D., F.A.A.P., Caring for Your Baby and Young child: Birth to Age 5., Child Care Books from the American Academy of Pediatrics, U.S.A., (1993)
- 8) 小林 登, 小児科 Mook 52, プライマリ・ケアのための育児学, 金原出版 (1988)
- 9) The Injury Prevention Program, American Academy of Pediatrics, America (1985)
- 10) 日野原重明, POS-The Problem Oriented System 医療と医学教育の革新のための新しいシステム, 医学書院 (1976)
- 11) 田川智子: 島根女子短期大学紀要, 26, 159~165 (1988)

(平成7年10月31日受理)

Informational Questionnaire

Please circle or fill in the requested information. (All answers are kept private.)

Date of Birth : Mo. _____ Day _____ Year _____

Marital Status : (Married / Unmarried)

Type of Work : _____

Nursery Attendant License : (Yes / No)

Length of Service : _____ Yrs.

Daily Working Hours : _____ Hours

Monthly Average Overtime : _____ Hours

Annual Leave : _____ Days

Availability of Monthly Physiological Leave : (a) Yes _____ Days (b) No

1. Please circle the applicable answers for the question of whether you want to continue working as a nursery attendant :
 - (a) Want to continue working
 - (b) Want to move to another day nursery
 - (c) Want to take a new job
 - (d) Want to become a full-time housewife
 - (e) Others (_____)
2. Please circle the applicable answer(s), or briefly explain, that which most correctly describes your motives for working as a day nursery attendant.
 - 1) Your most appropriate job
 - 2) The right job for a woman
 - 3) Your love for children
 - 4) Your desire to translate your nursing ideals into practice
 - 5) The importance of nursing as a social function
 - 6) No particular reason
 - 7) Absence of any other good job
 - 8) Attractive working conditions (wages etc.)
 - 9) Other (_____)
3. What is your view on the role a day care center has to play in a child's life ?
4. What is your goal in a child's growth ?
5. What do you think an ideal day nursery should be ?

15. Describe whatever problems are confronting the day care center. For instance, feel free to comment on the working conditions of attendants, the terms for recruiting, the status of the nursery, the specifics of nursing.